2016年 秋号

僧伽

第95号
僧伽編集委員会
〒921-8031
金沢市野町２丁目32-4
徳法寺内
TEL（076）241－5219
題字　本多　千翠

「生きるのも日常、死んでいくのも日常」
死は特別なものとして捉えられているが、死というのは悪いことではない。

樹木希林（きききりん）（女優、本名　内田啓子）さんの最近のインタビューでの言葉。彼女は二〇一三年、全身癌であることを公表している。

伊藤若冲（じゃくちゅう）　奇想の絵師

常徳寺　西山　彰

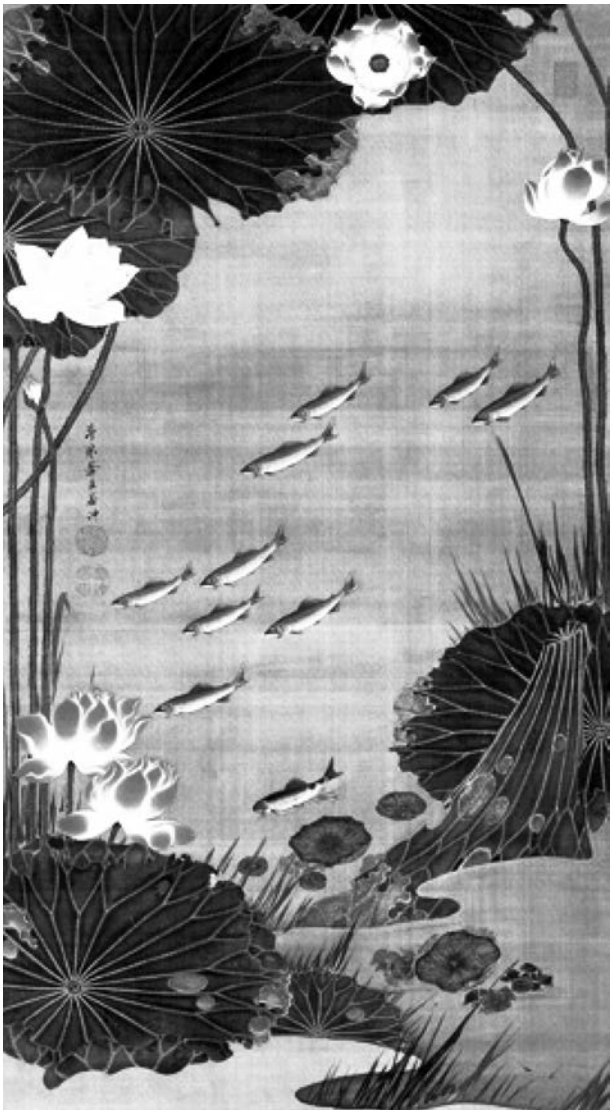
生誕三百年ということで、今年伊藤若冲が注目されている。

若冲の絵の特徴は、すべてが過剰である点である。ふつう絵というものは、描きたいものを中心に、それ以外のわき役は省略したりぼかしたりするものである。しかし若冲にはそんな常識は当てはまらない。すべてが異常なまでに細かく書き込まれている。

その結果、彼の描いたものは、画面のどの部分を切り取っても絵になる。そして、すべての要素を等価値に配置する手法は、画面全体に密度と独特の緊張感をもたらす。この感覚は、現代アートに通じるものとして近年高く評価されている。

写真は、私のおすすめの一点「蓮池遊魚図」（れんちゆうぎょず）である。これは相国寺に寄進された「動植綵絵」（どうしょくさいえ）という三十点からなる連作の中の一点である。他の若冲作品と違って、画面の中央部分が大きくあいている。題名からしてこの絵の主役は、魚であろう。しかし、どう見ても魚より蓮の葉のほうが大きく目立つように描かれているのだ。この人を食ったような大胆な構図、そしてリズム感。いかにも若冲、やってくれるなと、にんまりしてしまう一作である。

今、地元京都では、空前の若冲ブームが巻き起こっている。そのことはうれしいのだが、「若冲」が「ｊａｋｕｔｙｕｕ」となって、コムサ・デ・モードのＴシャツになっているのを見ると、思いは複雑だ。



（六面に関連記事）

松井誠志

ムスリム（イスラム教徒）って どんな人達？

午前四時、街のあちこちから、礼拝を呼び掛ける声がスピーカーにのって、聞こえてくる。人びとはモスクへ向かい、早朝の礼拝をする。それが終わると、路地に朝市がたち、売り手、買い手の声が混ざり合い、バイクや車の音と共ににぎわいを見せている。やがて、昼が来ると礼拝を呼び掛ける声が響く。人びとはモスクへ向かい昼の礼拝をする。終わるとまた今まで通りの生活が始まる。たくさんの話し声や笑い声。そしてあっという間に日が暮れて、一日最後の夜の礼拝をする人びとがいる。

これは私がインドネシアに滞在していた時の一日の流れです。

その当時、まだ私はムスリムではありませんでした。イスラムに対するイメージは〝厳しい、怖い、よくわからない〟という、多くの日本人と同じようなものでした。しかし、実際にインドネシアのムスリムとふれあってみると、日本では感じることができなかった、心地のいい人間関係を持つことができました。

例えば、ある日の断食が終わった夕方、食事の時間の時です。学生たちが、なけなしのお金を集めて買ったご飯を、ムスリムではない私に「一緒に食べよう」と言って分けてくれました。

これは特別な人だけの行為ではありません。年齢、男女、貧富の差を問わず、多くの人々が見返りを求めることもなく、当たり前のように行っているのです。

私は聞きました。「なにかいい事はあるの？」

するとある人は答えました。「誰かからの報酬より、アッラーからの報酬が一番いい」

最初は意味がわかりませんでした。でも、一日一日をみんな楽しそうに生活している姿を見て、イスラムの義務を遂行することと、楽しく生活することは逆行することではないと思うようになりました。なによりもアッラーが一番よく知っていると当たり前のように皆が感じているのです。すると、自然に、ムスリムに対するイメージが変わり、いつしか私自身がムスリムになることに抵抗はなくなっていました。

イスラムの大きな特徴として、そのひとがムスリムであるのかどうかは、その人とアッラーとの個人的・直接的な契約であるということが挙げられます。例えば、キリスト教の場合は、神父や牧師、仏教の場合は僧侶が、宗教と信徒との間にいますが、イスラムにはそのような立場の者がいないのです。仏教徒の多くの人は先祖から特定の寺と家が寺檀関係を結んでいるので、自動的に仏教徒となります。神社の場合は地域との関わりで、自動的に氏子となっている方が多い様です。キリスト教の場合は、赤ちゃんの時に親に教会に連れていかれて洗礼を受けます。イスラム教の場合、自分がイスラム教徒であるとアッラーに誓えば成立します。ただ、多くのムスリムは、赤ちゃんの時に親が代わりに入信告白をしてムスリムになります。

ですから「私はムスリムです」と名乗っている人に「お前はムスリムではない」と誰も否定することはできません。その人がムスリムであるかどうかは、アッラーが管理している事であって、人間が判断する事ではないからです。そんな中、もちろん悪いことをする人はいます。だからといって、「そんなやつはムスリムじゃない」とは、私は言いません。その人がムスリムと名乗っている以上、私は同胞として、助けることや正しい道を示す必要があると考えています。

今、金沢にもモスクがあります。そして、留学生や研修生などを中心に、約二百人のムスリムが金沢に住んでいます。もはやイスラムは遠い存在ではなくなりました。イスラムを好きに

ならなくてもいい、正しい情報のもとで判断してほしいのです。

「百聞は一見にしかず。」ぜひ交流してみてください。

金沢モスクでは、不定期で催し物を行っています。見学も受け付けています。

金沢モスク

金沢市若松町ツ一二〇
連絡先　松井
〇九〇-七〇八六-三四八〇
mm341232@yahoo.co.jp

プロフィール（略歴）
まつい　せいじ
一九七三年
金沢市で生まれる
一九九八年
ボランティアでインドネシアへ
二〇〇〇年
ムスリムに改宗
二〇〇六年
石川ムスリム協会　副会長

真宗人物伝　第四十一回

徳法寺　杉谷　淨

穴沢の入信房

今回は親鸞聖人の弟子で、関東二十四輩の第十六番である穴沢の入信房です。

穴沢の入信房を開基としている茨城県の寿命寺の伝えによれば、穴沢の入信房の俗名は佐竹義繁（義重）といい、常陸に勢力を持っていた佐竹氏の三代秀義の子となっています。義繁は父から城を任されていましたが、武士であることに疑問を持ち隠居します。その後、夢のお告げにより親鸞聖人のもとに弟子入りし入信という法名を賜ったとされています。

戦国大名として知られている佐竹氏ですが、甲斐源氏の流れを汲む名門で、平安時代後期には常陸国北部を支配下に置き、京の伊勢平氏や東国の奥州藤原氏といった有力勢力と結んで、関東で大きな勢力を持っていました。しかし、治承（じしょう）・寿永（じゅえい）の乱で源頼朝が伊豆で挙兵した際、源氏の流れを汲んでいるにもかかわらず、同盟関係にあった平氏方に味方したため、頼朝方に攻め込まれて領地を失い、奥州に逃亡することになります。後に頼朝の奥州藤原攻めの際には、奥州藤原氏との同盟を裏切り、頼朝方に参戦し勝利したため、御家人として常陸介に任じられますが、実質的な支配権を取り戻すことはできませんでした。親鸞聖人が関東に入ったのはこの頃です。

戦国時代に入ると再び勢力を持ち直して常陸国を統一します。秀吉が天下を取った頃には五十四万石の大大名となります。しかし、関ヶ原の合戦ではどちらにも与しなかったため、徳川幕府によって出羽国に国替えとなってしまいました。この時、佐竹氏は近隣の同族小大名を加えると八十万石を超えており、しかも合戦に参加しなかったため、国力は温存されたままでした。徳川家としては江戸の隣接地にこれだけの勢力がいることは脅威であったと思われます。国替え先は出羽半国で二十万石と半分以下の石高しかありませんでした。しかし、家臣を養うこともままならない状況の中、佐竹氏は絶えることなく続き、明治には侯爵となり、その子孫は現在秋田県知事を務めています。

このように、繁栄と衰退を繰り返して来た佐竹氏ですが、穴沢の入信房が親鸞聖人の弟子となった頃は、城を任せられているどころか、佐竹一族の多くが路頭に迷っていたとしてもおかしくはなかった時代です。ただし、元々が名門の一族ですから、高い教養は持ち合わせていたと思われます。

今でこそ、ほとんどの日本人が読み書きできますが、当時はほんの一握りの人にしかできることではありませんでした。親鸞聖人の弟子となって多くの人たちを束ねていった二十四輩の人たちは、そのような一握りの人たちだったのです。穴沢の入信房もそのような人の一人だったのでしょう。味方に付いた平氏が敗れたために地位を失い、高い教養を持ちながらも敗者として生きていかなければならなくなったことは、世の無常を感じ仏門に入ることを志させるのに十分な出来事であったと思われます。このような高弟たちの支えによって、親鸞聖人は関東に多くの念仏者を誕生させていったのです。

エッセイ

日本人にとっての「寺」のイメージ

常徳寺　西山　彰

レオナルド・ダ・ビンチの代表作「最後の晩餐（ばんさん）」は、一九七七年から一九九九年にかけて大規模な修復が行われた。その結果、この絵は意外な姿を現した。思いのほか明るい色調の絵だったのだ。

それは、私たちが、美術の教科書や画集で見てきた「最後の晩餐」とはまるで違っていた。暗く沈んだ色調は、長い年月の中で、ニスが変色したり、すすなどの汚れが付着したため黒ずんでいたにすぎなかったのだ。

「最後の晩餐」という重い宗教的テーマと、画面を覆う陰鬱な雰囲気に奥深さを感じてきた私たちは、完全に肩透かしを食らうこととなった。

このことは、私たちに一つの教訓を与えてくれる。古典的名画といえども、それが製作された当時の様子を想像することを忘れると、とんでもない勘違いをしてしまうということだ。

橋本治氏は『ひらがな日本美術史』（新潮社）の中で、興味ある議論を展開している。

中国の人が、日本に来て奈良や京都の寺を案内されたときに、「どうして誰もこの寺を修理しないのか」いぶかしがったという。中国人の目には、古いままに放置されているものにしか見えなかったのだ。

日本人は、古寺を「ふるでら」とは言わず、「こじ」と呼び、そのシックな美をめでる。「ふるでら」は廃墟だが、「こじ」は「古びのついた寺」である。しかし、仏教が日本に伝わった飛鳥時代、「寺」は中国風の「目もくらむような珍奇な建物」であった。そのことを考えると、中国人の言い分は正しいのだ。

彼らにとって、「寺」というものは現実に機能しているものだから、美しく華やかであって当然なのだ。したがって、寺が現実的な機能を失い、それが「美」になっている日本の現実は、到底理解できなかった。

これらの橋本氏の指摘は確かに厳しいが、ある意味で日本人の抱く「寺」のイメージを正確に描写していると言える。

もちろんここで言われている「寺」とは、京都や奈良の有名観光寺院のことであって、我々浄土真宗の寺にはそのまま当てはまらないかもしれない。しかし、日本において、本来の機能を失い廃墟同然となった寺が、それがゆえに「美」になっているという現実は否定できない。従って、そこに私たちがどれだけ深淵なものを感じ取ったとしても、それは宗教とは無縁のものなのだ。

先日池上彰さん出演のTV番組で、仏教の聖地であるブッダガヤの映像を見た。ここには、インド、中国、日本の寺が、並び立っている。インドや中国のそれは、日本のものと比べて、ずいぶん派手である。多くの日本人はこれらを見ると、悪趣味に感じることだろう。しかし、日本に初めて寺ができたころは、これらに負けず劣らず奇異で超現実的な建築物だったのだ。

杉谷淨のラジオ案内

十月四日（火）
十一月一日（火）
十二月六日（火）
FM-N1（七十六・三MHz）で午後一時半から一時間放送します。番組名は「生活一番シャトル便　住職のよもやま話」です。再放送は放送日の週の土曜朝七時からです。インターネットでも聞けます。

徳法寺のホームページのご案内

「僧伽」のバックナンバーや報恩講、春秋彼岸の案内、お講の案内、学習会のレジュメ、交流広場などを載せています。アドレスはhttp://tokuhou-ji.com/です。是非覗いてみてください。

真宗豆知識

上品・下品

これは、一般には「じょうひん」・「げひん」と読みます。「品」は「ひん」の他に、もう一つ「ほん」という読み方もあるのです。そして、仏教では「ほん」と読みますから「上品」・「下品」は「じょうぼん」・「げぼん」となります。意味も変わり「じょうひん」・「げひん」が立ち振る舞いを表すのに対して「じょうぼん」・「げぼん」はその人の徳の高さをあらわす言葉になります。

このように、音読みにいくつもの種類があるのは、漢字が長い時間をかけて日本に伝わってきたからです。「ほん」という読みは呉音といい、もっとも古くから日本で使われていた音読みです。「ひん」は漢音といい、遣唐使らによって伝えられた音読みです。そして、仏教では呉音で読むことが一般的です。

元々は、古代中国で人を分類するときに、この「品」を用いていました。上・中・下それぞれにさらに上・中・下を置いて九種類に分類し、これを九品（「くほん」と読みます。仏教では濁音変化して「くぼん」と読みます）と言います。最も素晴らしい人を「上上品」次いで「上中品」、「上下品」、「中上品」、「中中品」と続き、九品の中で最も劣った人が「下下品」です。

これが仏教に取り入れられ、法事で読まれる『仏説観無量寿経』に九品として用いられています。仏教では「上品上生（じょうぼんじょうしょう）」が最も徳が高く、次いで「上品中生」、「上品下生」、「中品上生」、「中品中生」と続き、最も徳の少ない者が「下品下生」となります。この時の「生」も呉音で「しょう」と読みます。漢音では「せい」です。

仏教の経典というと、インドで作られたと思っていらっしゃる方が多いと思います。もちろん多くの経典がインドで作られているのですが、中国で作られたものや、内容が改編されたものの少なくありません。数は少ないものの、日本でもいくつかの経典が作られています。これでは、仏教がお釈迦様の教えではなくなってしまうのではないか、と思われる方もいらっしゃるかもしれません。確かにおかしな方向に曲がってしまったこともありますが、多くの場合、より良い教えへと進化していったのです。

「下品下生」というのは最も徳の少ない者で、悪いことしかできない者のことです。この「下品下生」の者が救われる唯一の方法が、「南無阿弥陀仏」と念仏することであると『仏説観無量寿経』に説かれています。多くの仏教の諸師方が、これは救われることのない者を憐れんで説かれた方便であると理解したのに対して、浄土教の諸師方はここにこそ本当の救いがあると読まれました。それら浄土教の諸師方の教えに出会って、親鸞聖人は自らを「下品下生」の者であると頷かされます。そこで、すべて者が救われる道としての仏教に出会うことができたのです。このことは、多くの諸師方を通して、仏教が進化していった一例と言えるのです。

そう考えてみると「あなたは下品ですね」と言われても、そう悪い気がしなくなるかもしれません。

（浄）

『心の相談室』
毎月第四土曜日
午後三時～五時
東別院横
「いちょう館」二階
相談無料
日常生活でのいろいろな悩み、家族のこと、友達のこと、学校のこと、仏事の疑問等を、僧侶がお聞きします。

『サンガ茶話会』
毎月第一木曜日
午後三時～五時
東別院真宗会館内
囲炉裏の間
お茶とお菓子をいただきながら、お坊さんと気楽にお話できる空間です。相談というほどではないにしろ、ちょっと聞いてみたい、いろんな人と話してみたいという方大歓迎です。もちろん無料です。お気軽にご参加ください。

本の紹介

『若　冲』

澤田　瞳子著
文芸春秋社

伊藤若冲は、謎の多い人物である。京都の錦市場の青物問屋「桝源」の長男として生まれたが、商売はそっちのけで画業に没頭する生涯を送った。それ以外のことはほとんどわかっていない。

澤田瞳子氏は、小説「若冲」において、若冲のパワーの源泉は、亡き妻への贖罪の思いだったとしている。妻お三輪は、大店に嫁いだにもかかわらず、そこに待っていたのは、絵ばかり描いて家庭を顧みない夫、意地悪な姑、小姑だった。彼女は、失意と孤独の中で、土蔵で首をくくり、自ら命を絶った。そのことをきっかけに若冲は世の中に背を向け、ますます絵にのめりこんでいったというのだ。

鴛鴦図は、古来夫婦和合の象徴である。しかし彼の描くそれは、夫婦の情愛めいたものは一切なく、二羽の鳥は、「まるでこの世とあの世、異なる世に暮らすかの如き距離が、彼らの間にはあった。」

あれっ、若冲って生涯独身じゃなかったっけと思う方もおられるだろう。もちろん「動植綵絵」の中の一点、「雪中鴛鴦図」（せきちゅうえんおうず、図一）からインスピレーションを得た澤田氏の創作である。しかし若冲の心の闇を描いた小説として大変面白かった。

ここで一つ、伊藤若冲が晩年開発した驚くべき手法を紹介しておきたい。

写真は、若冲の「樹花鳥獣図屏風」（じゅかちょうじゅうびょうぶ）と題された六曲一双の屏風絵の一部を拡大したもの（図二）である。ここでは画面を無数の小さな正方形で仕切り、その一つ一つに彩色を施しているのが分かる。しかし離れたところから眺めると、無数の正方形の点が繋がって像を結ぶようになっている。

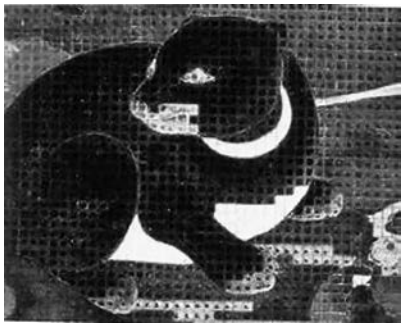
図一　「雪中鴛鴦図」

この手法は、ヨーロッパの印象派のそれと原理的に同じである。印象派の画家たちは、画面に原色を点在させることによって、視覚の上で色を混ぜることに成功した。それは、絵の具をパレットで混ぜるよりもはるかに鮮やかな色彩効果を生み出したのである。そしてそのことを理論的に完成させたのが、後期印象派のジョルジュ・スーラであった。

しかし、若冲は、この「升目描き」と呼ばれる手法で、印象派の完成者スーラを一世紀以上先取りしているのである。しかも、江戸時代中期に、スーラよりはるかに高い完成度を備えていることは驚異としか言いようがない。

澤田氏は、この技法に関して、実にほほえましい文学的エピソードを創作している。そこでは、ようやく罪悪感から解放された若冲の、穏やかな晩年が描かれている。人は罪悪感や贖罪といったうしろ向きのエネルギーだけでは生きられないのだ。

（彰）



図二　「樹花鳥獣図屏風」

各寺のご案内

◆常　徳　寺

金沢市寺町
五丁目一番二九号
TEL二四一―二六四九

◎報恩講
十月十日（祝日）
お逮夜　午前十時
お日中　午後一時半
法話　佐々木　五六師

◆徳　法　寺

金沢市野町
二丁目三二―四
TEL二四一―五二一九

◎お講（石坂同信会主催）
毎月二十一日
午後七時半より
講師　十月　表　美智子
十一月　杉谷　浄
ご自由にご参加ください。
十二月、一月、二月はお休みします。

編集委員
西山　彰（常徳寺）
杉谷　浄（徳法寺）